

結審集会

勝ち取ろう、完全勝訴
九州建設アスベスト訴訟

とき 2014年 3月19日 (水)

ところ 福岡市民会館 (小ホール)
福岡市中央区天神 5丁目 1番 23号



当日の流れ

- 8:00 裁判官・職員お出迎え宣伝
- 10:00 県内同時街頭宣伝行動
- 12:45 福岡地裁門前集会
- 13:30 結審期日開廷
- 17:00 結審集会
- 19:00 全国交流会

被害が広がる！なくせ！つくなくせ！



九州建設アスベスト訴訟本部

事務局 福岡県建設労働組合

☎092-511-4703

福岡市南区清水 1丁目 22番 9号

2014.3.19

九州建設アスベスト訴訟

結審へ

世論と署名の総結集を



昨年11月17日に開催した「第2回訴訟団交流会」では、原告団・弁護団・支援団体が絆を深めあつた



提訴行動には多くの仲間が結集した (2011年10月5日)

世論と署名の総結集を!!

昨年12月6日には、九州訴訟本部へ全国から寄せられた『公正判決要請署名』23万筆分を福岡地裁へ提出しました。
その後も続々と署名が寄せられており、現在37万筆 (※2月18日時点) を超えています。



37万筆を超える 提

全国から寄せられた署名を前にする平元原告団長

「九州建設アスベスト訴訟」は、2011年10月5日の提訴以来、異例のハイペースで裁判が進められ、2年半余りで20回の期日を重ねてきました。残すは、3月19日の結審期日のみとなりました。判決は、「夏ごろ」と思われます。
当初、「2013年12月25日結審」とされましたが、4月に裁判長が、9月に右陪席が交替し、これでは裁判官3人のうち2人が、「原告本人の切実な生の声を聞かないままに判決を書く」ということになってしまい、「このままでは、被害実態を十分に反映した判決が望めない」として、裁判所に結審延期を申し入れ、国と企業側の一部から延期反対の意見もありましたが、受け入れられ、3月19日に結審と決まりました。

たたかひの歩み



この間、のべ30回を超える「大規模宣伝行動」を実施

法廷内・外のたたかひ
法廷の中では、原告のみならず被害者実態と深刻さをありのままに訴え、原告代理人である弁護団は、その想いを引き継ぎながら、国と製造企業の加害を追究し、勝訴判決を裁判所に書かせるために全力をあげています。
法廷外のたたかひについても、提訴後に、弁護団・原告送り出し団体・支援団体などで「九州建設アスベスト訴訟を支える会」を結成し、これまで傍聴支援、行動支援、カンパ支援など、世論に訴える取り組みを進めてきました。
昨年9月には、「支援要請の九州キャラバン行動」を実施。そうした取り組みもあり、現在、支える会への加盟は、103団体・4個人と広がっています。



原告団長
平元 薫 (70歳)
(大工・肺ガン)

私は、アスベストが原因で肺ガンになり、現在は自宅療養しています。
外国では何十年も前にアスベストの製造・販売が禁止になったと聞いています。しかし日本では、国と企業がアスベストの危険性を知らず、製造・販売を続けたために、私たちは被害にあいました。国と企業は、その責任をとって、私たち被害者に謝り、償って欲しいと思います。



原告団 副団長
石原 律子
被災者
故石原誠治さん
(享年70歳)
(塗装工・肺ガン)

仕事一筋で生きてきた夫でした。その仕事で、アスベストを吸い込みました。これ以上夫のような被害者を出したくありません。私はそのために裁判に加わることを決意しました。国やアスベスト建材を作った会社は、きちんと責任を取るべきです。どうか裁判所には、被害者や私たち被害者遺族の声を受け止めてください。



原告
中村 吉子
被災者
故中村保茂さん
(享年65歳)
(内装工・肺ガン)

なぜ夫が命を奪われ亡くならなくてはならなかったのか、なぜ私たちがこれほどまでに苦しまなくてはならないのか、いまだに理解できません。
国と建材メーカーは、なぜもっと早くアスベストの製造や使用を禁止してくれなかったのでしょうか。
建材メーカーや国には、私たちの疑問に答え、そして私たちの苦しみを理解してほしいと思います。



原告
弥永 學
(76歳)
(大工・肺ガン)

私は、現役の頃は、風邪一つひかず、病気とは無縁で、大工道具の手入れが趣味という、仕事一徹の人間でした。大工の技術を生かして、少しは役に立つことをしたいのに、思うように動けず、歯がゆく無念です。
裁判では、アスベストの被害が広がった責任を、はっきり認めていただきたいです。企業と国には、早く償って欲しいです。



原告
原 サエ子
被災者
故原 悦夫さん
(享年56歳)
(配管工・悪性胸膜中皮腫)

国やメーカーは、自分たちに責任はないと言いつつ、自分たちの愛する家族が、アスベストが原因でガンになって苦しむの末に亡くなったときに、同じことを言えるのでしょうか。夫は、経済成長のためには人の命や健康がむしばまれてもいいという論理の犠牲になりました。
あんなに元気で健康で、仕事も真面目で、よく笑い優しかった夫を、なぜ突然、しかも苦しみぬいた末に失わなければならなかったのでしょうか。幸せだった私たち家族の生活を返してください。どうか、夫のあの耐え難い苦しみを今すぐ償ってください。



原告
津野 巧
(62歳)
(配管工、解体工肺ガン)

私は、自分の肺ガンがアスベストによるものということを知りませんでした。手術後まで、そうした指摘を誰かから受けるということもありませんでした。
現在は、遊んでいては生活ができませんので、無理して仕事に出ています。実際の作業はきつくてきつくて、現場の指揮管理にあたるだけで、それでも息切れが激しくなったり、体がすぐだるくなったりします。
私はその度に国とメーカーに一言文句を言いたい気持ちでいっぱいになります。



原告
石田 秋寿
(71歳)
(左官・肺ガン)

私が仕事で使っていた「モルタル混和剤」の中にアスベストが入っていたとは知りませんでした。建材メーカーや当時の仕事仲間からもその危険性を指摘されたことはありませんでした。
今は、粉まみれになった私の作業着を毎日洗濯していた妻が、私と同じようにアスベストの影響で肺ガンになるのではないかと不安です。



原告
高橋登代子
被災者
故高橋一志さん
(享年71歳)
(シャッター工・悪性胸膜中皮腫)

知人のアメリカ人牧師に主人のことやこの裁判のことを話したら、「アメリカでは、すでにアスベスト被害者は救済され、解決済みだ」と話し、「日本ではまだ裁判をやっているのか」と、驚いていました。
それほど日本(国)は、アスベスト問題に対しての反省や対策が遅れているのだと思います。
被災者も、残された遺族も、被災者や遺族になってからしかわからない苦しみがあります。国や企業は、これらの苦しみに対して、責任を持って、早急に償うべきです。



原告
柴田 清子
被災者
故柴田保光さん
(享年62歳)
(内装工・悪性胸膜中皮腫)

夫は生前、「残された家族のため、同じアスベストの病で闘っている仲間のため、そのときが来たら病理解剖してほしい」と、家族に常々言っていました。
これ以上、夫につらく痛い思いをさせたくない。家族は反対しましたが、夫の遺志を尊重し、病理解剖しました。病理解剖から戻った夫の顔を見ると、私は、涙が止まりません。そして、主人の顔は、穏やかながらもすべてをやりきったように見えました。
その4ヶ月後、労災認定がおりました。生前に認定が受けられていたらどんなに喜んだらうかと悔しい気持ちでいっぱいです。



原告
岩崎小百合
被災者
故岩崎蔵太さん
(享年66歳)
(塗装工・悪性胸膜中皮腫)

主人は平成23年5月24日に亡くなりました。その5月のカレンダーを剥がすと主人が本当に私のもとから去ってしまったような、例えようのない気持ちになるため、触ることができません。
自宅の壁には、主人が亡くなった平成23年5月のカレンダーが掛ったままになっています。



原告
金柿 洋右
(70歳)
(大工・石綿肺)

私は、もともと自分で建てた家に住んでいました。しかし、病気になるまで、仕事ができなくなって収入もなくなったことで、自分の家を手放しました。
そのことが一番悲しいです。大工として、最後は自分の建てた家で死にたかったです。国と企業には、アスベスト規制を怠った責任をきちんと果たしてほしいと思います。



原告
南嶋 秀子
被災者
故南嶋四十一さん
(享年61歳)
(配管工・肺ガン)

夫は、アスベストさえなければ、まだ仕事もできたし、孫と過ごす夢も実現できました。
声も出せない、きついすら言えない、そのような状態で命を失いました。なぜ自分がこのようなならなければならないか無念で仕方なかったと思います。
私は、その夫の気持ちを代弁したいと思っています。国やアスベスト製品を作っていたメーカーには、夫のあの耐えたい死を償ってほしいと思います。



原告
池口 克子
被災者
故池口雅利さん
(享年63歳)
(電工・悪性胸膜中皮腫)

主人が、アスベストが原因で倒れてから、毎日病院に通って看病し、体力的にも精神的にも大変な思いをしました。長男も、障りを抱えながらも、私を病院に送迎してくれたり、看病をしたりして協力してくれました。
国と企業には、アスベストが危険なものであると知りながら、使い続けた責任をとってほしいと思います。



原告
石橋ウメ子
被災者
故石橋國彦さん
(享年59歳)
(溶接工・悪性胸膜中皮腫)

まさか自分の夫が、60歳にもならず、中皮腫というガンで急に死んでしまうとは思っていませんでした。こんなことは、テレビニュースの世界のことだと思っていました。
夫は生前、「アメリカでは早々とアスベストの使用が中止になっていたのに、日本で使っていた現状がどういかならなかったのか」と、言っていて、娘もその言葉が忘れられないと言っていました。
国とアスベスト製造企業は、もっと早く対処できたのではないのでしょうか。

原告の訴え

九州建設アスベスト訴訟団

「勝訴」へ最後まで

被害の苦しさと、辛さを知っているが、もう二度と繰り返さないでください!!